

安田常雄著, 『日本ファシズムと民衆運動』, れん
が書房新社、一九七九年一月、六〇五頁、六〇〇
〇円

著者	西田 美昭
雑誌名	社會經濟史學 47(2), 214-216
巻	47
号	2
ページ	214-216
発行年	1981-08-30
URL	http://hdl.handle.net/2297/9633

『日本ファシズムと民衆運動』

西田 美 昭

本書は「長野県に分析の焦点をしぼり、同時代の刻印を受け
て発生し、屈折し、消滅した、いくつかの主要な運動を可能な
限り実態に即して実証的に追跡することによって」「大正デモ
クラシーから日本ファシズムへの転回の過程的構造」に「何が
しかの照明を与える事」(一三頁)を意図している。具体的に

は、「農民自治会長長野県連合、日本農民組合長野県連合会、上
小農民組合連合会、全国農民組合長野県連合会、日本農民協会
という五つの農村社会運動組織の理念思想、地域における具
体的な運動実態の分析を軸に、これらの五つの運動のもつ一九
二六―二八年(初期)、一九二八―三〇年(過渡期)、一九三一
―三三年(昭和恐慌期)という三つの時期における三層の対照
的、対抗的、歴史的構造を追求しつつ、大正デモクラシーから
日本ファシズムへと巡回する同時代情況の論理を究明」(一
六―一七頁、カッコ内は評者が付したもの)することである。

そしてそのための方法として著者は次のような諸点を強調す
る。第一は、集団のもつ理念、イデオロギーと農民層の生活の

直接要求という両側面の統一において運動の特質を分析する
こと、つまり「具体的な歴史過程のなかに置かれた農民運動の
経済的、政治的、社会的性格との区別と連関、換言すれば緊張の構
造に注視」(一九頁)すること。第二は、長野県の農村社会運
動において大きな役割を果たした青年運動との関連に注目するこ
と。つまり「同一の思想的、問題情況を起点とした〈農村青年〉
層の両極への分離・結集の過程的構造の分析」(二〇頁)を行
うこと。第三に、「運動展開の基底に広がる深い生活者の基層
との緊張に基づいて運動の絶対化を自らに禁ずる視角に立つ」
こと、つまり「全面屈伏と抵抗の両極の振幅のなかにゆれるよ
うに変質した民衆の実体」(二二頁)の重さを自覚しつつ分析
するということである。

この時期の農村社会運動を分析する視角・方法としては、き
わめて正当かつ魅力的なものといえる。そして本書を通読すれ
ば明らかのように、この視角・方法は、生かされ、左翼「革
命」派と右翼「革新」派の対抗的構造を軸とする長野県農村社
会運動の全体像が浮き彫りにされているのである。

二

六〇〇頁近い本書を、短い紙幅で過不足なく紹介することは
不可能である。すでに鈴木正幸氏の適確な要約(『史学雑誌』八
九編九号、一九八〇年九月)もあるので、ここでは評者が理解
しえた特徴点のみを簡単に摘記するにとどめざるをえない。

第一章は、著者の区分による初期に展開した農民自治会長長野

県連合会の運動および日本農民組合長野県連合会の運動を、それぞれの組織のあり方、理念形成の原理にまで立入って分析を加え、その「対照的性格」を描出した点に特徴があると思われる。すなわち農自県連が「精神文化的解放」も重視し「農村モラトリアム」の要求、「非政党同盟」の結成など多様な運動を展開したのに対し、日農県連の方は、「経済的解放」を第一義にすえ、運動も「ほぼ小作争議にひきしぼった」のである。このため組織対象は農自県連が自作や小地主も含む「耕作者」であったのに対し、日農県連の方は「小作人組合運動」をめざす小作・自小作が中心であった。またより根本的な違いとしては農自県連が自然発生性を重視し、かつ「組織の前にまず農民」があるという組織観をもっていたのに対して、日農県連の方は「まず組織を結成し、目的意識的指導による争議展開」（一三七頁）という組織観をもっていた点である。しかし、両組織とも、農自県連は「指導」の実質化をはかることができず、また組織主体も弱体であったために、日農県連は組織的脆弱性ととも「農自型直接要求同盟形態の意義に無自覚」（一三七頁）であったために、運動としての脆弱性を克服することはできなかったのである。

第二章は三・一五の弾圧から一九三〇年秋の全国農民組合による県下農民運動の組織的統一にいたる時期の分析である。ここでの分析の特徴の第一は、三・一五による日農県連の弱体化という状況もふまえ、地域的連合組織として結成された上小農民組合連合会を、組織・理念的には農自県連のそれを受けつぎ

つつも、実際の運動としては「初期の日農県連の小作争議対策を継承」し、かつその「狭隘性」を超えようとした組織とおさえられていること、つまり農自県連・日農県連という二つの流れをある程度発展的に止揚し、その後の農民運動の統一の前提をつくりだす役割を果たした組織とおさえられている点である。第二は、右翼「革新」派の運動体である日本農民協会の主宰者と合恒男の思想形成史をあきらかにした点であるが、日蓮主義・ガンジー主義との出合・「農道」の発見を経て天皇制原理にもとづく昭和の超国家主義へ辿りつく過程が興味深く描かれている。

第三章は、全農県連（全国会議派）の活動とりわけ農民委員会運動、および日本農民協会の農村救済請願運動を克明に分析し「左翼農民運動によるファシズムへの抵抗」（四八八頁）がなぜ崩壊し、また「右翼農民運動による下からのファシズム運動」もなぜ挫折するかを内在的にあきらかにしている。まず全農県連についていえば、「勤労農民の多数者獲得」の上で決定的に重要な「部落世話役活動への自覚的対応の欠落」があったため結局ファシズムへの「最後の抵抗線」（三六三頁）たりえなかった。また日本農民協会も、運動によって「獲得した一定の支持」（四四〇頁）があったものの、その観念性のゆえに「農民の直面する現実的要求を体现しうる運動を持続的に遂行（擬似革命性）」することはできなかったのである。つまり両派とも「農民」をひきつける内実を欠いていたことが、運動の「崩壊」「挫折」の内在的要因になっていることを確認せざるをえないのである。

本書が力作であるゆえんは、「定型のイデオロギーとは無縁に、不断に動揺しつつ自らの生活の現実性に打ち続ける下層生活民」¹⁾農民を、それぞれの運動体がどれだけひきつける内実を備えていたかを、その理念、組織・運動の実態を通して見事に描出した点にあると考える。とくに運動体の理念・組織観をあきらかにしていく分析は圧巻であり、本書により、長野県の農村社会運動を担った諸組織の性格はより鮮明にされたといつてよい。

しかし同時に指摘しなければならないことは、こうした思想的分析の見事さに比較して、小作争議をはじめとする各地域で展開された運動それ自体の分析・叙述において、平板さが目立つことである。これは、著者が重視してやまない〈農村青年〉〈農民存在〉の分析が「理念的な存在様式」としてしか示されず、現実には各地域で生活者として存在した〈農民〉それ自身には向っていないということと関連する。運動の一端を担い、あるいは担いえなかった人々²⁾農民の現実の姿との緊張において実際に展開された各地の運動をとらえ返した時、諸運動の分析は生きてくるのではあるまいか。

これとの関連で疑問に思うことは、本書においては、村落における支配秩序の問題がほとんど視野に入っていないという点である。例えば、昭和恐慌期の北信不況対策会などの運動は「旧来の官製組織を背景としない」(四一〇頁)ものとして高

く評価しているが、そうであろうか。実際には北信不況対策会も含めて不況対策運動は「旧来の官製組織」あるいは村落支配体制に一体化していく傾向を示したのがこの時期ではなかったろうか。その意味では、左翼農民運動と右翼農民運動を直接〈農民存在〉との距離において対比する前に、更生運動などにつながる体制側の動きあるいは支配体制そのものとの対比において諸運動の性格はまずはかられる必要がある。こうしたとき二・四事件の弾圧を最終的契機として壊滅せしめられる全農県連と、請願運動の挫折後ただちに国家政策の「積極的推進者」になっていく日本農民協会の組織的性格の違いは一層鮮明になるのではないだろうか。(れんが書房新社、一九七九年一月、六〇五頁、六〇〇円)